

私はその人を常に先生と呼んでいた。だからここでもただ先生と書くだけで本名は打ち明けない。これは世間を憚^{はば}かる遠慮というよりも、その方が私にとつて自然だからである。私はその人の記憶を呼び起すごとに、すぐ「先生」といいたいくなる。筆を執^とつても心持は同じ事である。よそよそしい頭文字^{もじ}などはとても使う氣にならない。

私が先生と知り合いになつたのは鎌倉である。その時私はまだ若々しい書生であつた。暑中休暇を利用して海水浴に行つた友達からぜひ来いという端^は書^{がき}を受け取つたので、私は多少の金を工面^{くめん}して、出掛ける事にした。私は金の工面に二、三日^{さんち}を費やした。ところが私が鎌倉に着いて三日と経^たたないうちに、私を呼び寄せた友達は、急に国元から帰れという電報を受け取つた。電報には母が病氣だからと断つてあつたけれども友達はそれを信じなかつた。友達はかねてから国元にいる親たちに勧^{すす}まない結婚を強^しいられていた。彼は現代の習慣からいうと結婚するにはあまり年が若過ぎた。それに肝心^{かんじん}の当人が氣に入らなかつた。それで夏休みに当然帰るべきところを、わざと避けて東京の近くで遊んでいたのである。彼は電報を私に見せてどうしようかと相談をした。私にはどうしていいか分らなかつた。けれども實際彼の母が病氣であるとするれば彼は固^{もと}より帰るべきはずであつた。それで彼はとうとう帰る事になつた。せつかく来た私は一人取り残された。

学校の授業が始まるにはまだ大分^{だいぶん}日数^{ひかず}があるので鎌倉におつてもよし、帰つてもよいという境遇にいた私は、当分元の宿に留^とまる覚悟をした。友達は中国のある資産家の息子^{むすこ}で金に不自由のない男であつたけれども、学校が学校なのと年が年なので、生活の程度は私とそう変りもしなかつた。したがつて

ひとり一人ぼっちになった私は別に恰好かつこうな宿を探す面倒もたなかつたのである。宿は鎌倉でも辺鄙へんびな方角にあつた。玉突きだのアイスクリームだのというハイカラなものには長い暇なわてを一つ越さなければ手が届かなかつた。車で行つても二十銭は取られた。けれども個人の別荘はそこにいくつでも建てられていた。それに海へはごく近いので海水浴をやるには至極便利な地位を占めていた。

11.54659pt

私は毎日海へはいりに出掛けた。古い燠くすぶり返つた藁葺わらぶきの間あいだを通り抜けて磯いそへ下りると、この辺へんにこれほどの都会人種が住んでいるかと思うほど、避暑に來た男や女で砂の上が動いていた。ある時は海の中が銭湯せんとうのように黒い頭でごちゃごちゃしている事もあつた。その中に知つた人を一人ももたない私も、こういう賑にぎやかな景色の中に裹つつまれて、砂の上に寝ねそべてみたり、膝頭ひざがしらを波に打たしてそこいらを跳ね廻まわるのは愉快であつた。